

2014年6月24日

第21号

自然と文化だより

発行：NPOシニア自然大学校

自然と文化科

*****目次*****

- P1 今号の TOPICS 武井 貢
P2 新専任幹事 堂瀬広幸
P2 仲間たちの近況報告 (1)
1班 上田忠司
P3 仲間たちの近況報告 (2)
2班 金澤忠昭
3班 内田きみ子
P4 仲間たちの近況報告 (3)
4班 野村健次
5班 飯田正恒
P5 仲間たちの近況報告 (4)
6班 大庭 健
P5 リレー随筆 岩城正大
P6 私の玉手箱
森の熊さん一家 宮阪信次
P7 自由題 草抜き考(3)
P7 俳句・川柳・絵画サロン
P8 自由題 藤(フジ)の花談義

◇自然と文化だより◇

21号に投稿頂いた皆様、有難うございました。6班体制での初月号です。6人の方に近況を執筆頂きました。たくさんの方に書いて頂くので通信機関誌のような格好になりました。相互の親睦の為に役立てばと思います。これからの方も宜しくお願い致します。玉手箱、自由題にも投稿有難うございました。

N.Take



今号のトピックス 「外部から見た自然と文化科」

武井 貢

平成26年3月に10周年記念誌を発行いたしました。この機会に当科の所属員としての目線で見のではなく、「研究部全体から見た目線」で、当科を検証してみました。

<研究部全体から見た当科の検証>

1. 科の理念、モットー、運営方法、組織と体制等
・・・他科と遜色ない充実したものになっている。
2. 各種の活動内容（自然観察、文化や史跡探訪、調査活動、シニア自然大学校の活動に対する協力、HPの充実、機関誌の発行、親睦のための宿泊研修旅行の実施等）
・・・他科と遜色ない活動を実施している。
3. 公開講演会開催
・・・科員が多く資金的にゆとりがないと開催できない当科独自の行事であるが、他の研究科も聴講できるよう開催日を検討しないともったいない。共通講座との連携も考えては如何なものか。
4. 公益的な社会貢献活動（自然環境教育、環境学習支援、子供の健全教育、自然環境保全と回復活動等の推進）
・・・他科より活動量が少ない。認定NPO法人への移行を目指した外向きの要素を加えた活動の拡大、イベント等に参加要請があった場合は率先して参加できる即応体制・対応方法を検討し整える必要がある。又、活動の場（場所）を開拓する必要がある。
5. 本部中枢組織内へのスタッフ派遣
・・・当科は高等科修了生で構成されているため「質」「量」とも優れた人材が多い。本部からのスタッフ要請がある時は優秀な人材を派遣し、運営や行事の実施等で活躍していただく必要がある。
6. マンネリ化の防止
・・・当科も組織が大きくなり、10年の歴史を重ねて来ると身が重くなり、大企業病を起こすだろう。活動の「質」と「量」の問題を念頭に置きながら、時代と社会の変化を感じ、「改善」と「創造」に取り組むことが必要である。

当科はシニア自然大学校の中核組織のシンクタンクである。伝統のある諸活動を引き継ぎ、実績を踏まえて、原点を見つめなおし、新たな決意で、時代の変化に対応しながら、自主独立の精神を持って活動する。又、科員の居場所として、より良き自然と文化科を目指し、来るべき15年に向かって歩いて行こうではありませんか。

全体の事務を統べてくる・・・(人)

総務委員会専任幹事 堂瀬 広幸

辞典で総務を引くと「全体の事務を統べてくる(人)」と書いています。この3月に肥塚代表から総務を担当して欲しいと打診がありました。後日謹んで了承。昨年1年間班長として当科の運営を見てきて、全科員が何かそれぞれの役割をもって活動し成り立っていることを目の当たりにして・・・経験不足は明白であります。少しでもお役に立てればと思った次第です。前任者の西村さんに壱から教をいただき、下浦さんから勘定の事、畑さんからは総務の括りをといったような段取りを聞いただけで、これは大変だという事が直ぐに分かりました。当科の柱でもある公開講座の会場にはもう少し快適な処は無いものかと、思案をしております。総務といったら予算の管理ですが、まだよく解っておりません。

ひとつ気になる事があります。それは保険の事で、シニア自然大学校では、安心して活動できる環境づくりに資するため、NPO 活動中の傷害保険、国内旅行保険及び賠償責任保険に加入しております。又今期は昨年と違って処々改定があります。以前は、自宅と活動場所との間の通常経路往復中の保障であったが、今期からは集合地点から解散地までの間、同窓会活動は対象外、二年続けて保険請求した場合は次年度の保険請求は不可等々です。気になるというのは全科員シニア世代で、自然観察はもとより目的地までの道中も注意を怠ってはいけないということで特に健康、健脚に自信のある方ほど気を付けて頂きたいと思う次第です。

当科も10周年を迎え、102名の大所帯で4班から6班になり、活動にも多々工夫が必要で、班長・副班長、各委員会幹事にもよくよくお願いしたいと思います。

10周年誌を拝見いたしておりますと、先ずOBからのメッセージ、各自然観察、社会貢献、植生調査、山歩き、歴史・文化、施設見学等各分野に於いて活躍されている各氏のエネルギーに自然と文化科の精神を感じます。総務はそこにあって全体の事務を統べてくるため、下浦さん、吉川さんの協力を得、西村さんの助言もいただき、勿論科員のご理解も頂戴して恙無く務めたいと考えております。至らぬところが多々出てくると思いますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

了

藤倉山にカタクリの花を訪ねて

1班 上田 忠司

4月14日エコバスツアーに参加して、藤倉山にカタクリの花を訪ねた。今回は初めて家人と連立っての自然観察会である。日頃は自然観察でどこへ行った、写真を見せて、こんなに綺麗な花があったと話ばかりなので何とか綺麗なカタクリの花が見られればと願っての出発であった。天気は快晴、車窓には桜が満開となかなか調子がいい。今庄駅前にバスを止めて観察会に出発した。5分ほど街中を歩いて新羅神社に到着。清掃していた氏子さんたちによると、今年は鹿に食われてカタクリの花が少ないとのことである。しかし、境内の登り口からカタクリの花が綺麗に咲いているではないか。一同、感激しながらシャッターを切る。ヤマエンゴサクにイカリソウ、ショウジョウバカマと色々な花が足元を賑わす。カメラ片手に列がどんどん長くなる。タムシバはもう盛りを過ぎているが、クロモジ、オオカメノキなど木々も枝いっぱい花をつけていた。ところで、鹿の被害はどこに。たしかに、麓の人がいる辺りはカタクリの花もたくさん見られたが、山を上がるにつれて花の数が少なくなっている。ふつうは全山紫に染まるほど咲くらしい。燧ヶ城跡で昼食後下山。麓で、氏子さんにコーヒーをご馳走になり、お菓子まで出していただいた。庭を見ると山の中では見つけられなかった白いカタクリの花が咲いていて、二重にラッキーであった。

13時30分今庄駅を出発、次の目的地の木ノ芽峠のザゼンソウを目指した。今庄スキー場に到着。ゲレンデ横を通り、後一步と言うところで行けども行けどもたどり着かない。バスは登りから下り始めたので道を間違えたことに気づく。たまたま出くわした車の案内で、ようやく旧北国街道にある木の芽峠に到着。峠の茶店は築500年と日本で2番目に古い民家だそうだ。主は平清盛より数えて37代目で、織田信長は分家など、色々な話を伺い、秀吉や明治天皇が休息されたと言う部屋も拝見した。今でも囲炉裏などを使い昔ながらの生活をされていた。この人の私有地にザゼンソウが咲いているため、入るにはご挨拶が必要なのだそうだ。ザゼンソウはちょうど満開であった。カタクリ、ザゼンソウと目的の花が見られて家人も満足の一日であった。

山登りのススメ

2班 金澤 忠昭

「学問のススメ」では、天は人の上に人を作らずと説いた。しかしながら、人の上には山がある。

山登り8年生・自然大学3年生の男が今年、古希を迎え喜寿から傘寿へ向かおうとしている。

500億年ほど生きてみたいと思うが、それは無理なことだと知った。ヒトとしてこの世に生を受け、戦争を知らずにここまで来られたことを良しとしなければなるまい。

子供の頃、遠足わくわく。枕元にリュックとおやつを並べ、てるてる坊主をつるした。仕事でも「こんな日は、弁当を持って山へ行きたい」と思いながら、屋内でくやしい時間を過ごしたものだ。

今や、毎日が日曜日。毎日のように弁当とおやつを持って出かけていく。有難いことである。お天気が続き過ぎると「雨降ってよ！少しは家に居たいよ！」と思うのは、贅沢に毎日を過ごしている証拠だ。

特に、自然と文化科に入り、班長の仕事が舞い込んできた5月には、その思いが強くなった。緑の班旗をリュックにひるがえし、先輩たちの顔をおぼえながら、草や木の名前もおぼえていく……。

素晴らしい先輩たち！（^_^）

美しい草木！

ああ！なんというしあわせ！

この木なんの木？

月に10回も山へ行く。単なる木、単なる葉っぱでは済ませられないのだ。違いが気になる。葉っぱも、形や色合い光りぐあいが違うのである。それでシニア自然大学校に進み、元気に米寿をめざすのだ。

「このような生活がいつまでも続きますように！」と、願う。



印象深い奄美の旅

3班 内田 きみ子

早いもので、自然大学校に入ってもう7年目を迎えた。

そこで出会った多くの人々と、あちこち旅行する機会にも恵まれた。仲良くなった人2～3人での旅、同期でわいわい気楽な旅等、さまざまである。そのうちの一つが2月初旬3泊4日の奄美への旅であった。

3月まで当科に在籍されていたOさんに誘われ、行きたいのはやまやまなれども、ちょっと心配なこともあり、どうしようかと悩んでいたが息子のめったに行けない所やから行ってきたら～と言う一言に背中を押され、参加させて頂いた。女性だけでの総勢9人の旅であった。目的は勿論、植物観察だ。

大阪では見られない珍しい植物との出会いがたくさんあった。

海岸沿いには南国を代表する植物の一つ、「アダン」、金作原の原生林では「ヒカゲヘゴ」や「オキナワウラジロガシ」の板根を観ることができた。湯湾岳には固有種の「ユワンツチトリモチ」という、一見きのこのように見える寄生植物もあった。



これは一時、環境省の絶滅危惧種にも名前が挙げられていたということだ。

その他にも、まるでアケボノソウかと思わせるような「ヘツカリンドウ」や「ヒメハギ」の色鮮やかさ、「リュウキュウウマノスズクサ」の果実の大きさにもビックリ、など多くが今も印象に残っている。

映画「男はつらいよ」のロケ地にもなったという加計呂麻島にも行き、デイゴの並木道も散策した。季節を変えて、また訪れたいと思った奄美の旅だった。参加の皆さんに感謝したい。



冬鳥夏虫

班長体験記

4班 野村 健次

5班 飯田 正恒

目には青葉山ホトトギス虫いっぱい。新緑の季節は虫の観察にはもってこいの時期である。私が虫に興味深くなったのは自然大学校に入ってからで、不謹慎ながら植物観察の合間に現れる虫のほう面白くなってきた。早春から晩秋までいろいろな虫の活動に触れる機会があり、野外活動ではその都度新しい発見に出会うことができる。特に草本調査の時などは、みなさんが丹念に植物を見ていて虫がいて、「おーい、何かおるで」と声をかけただけ。1人では見過ごしてしまうような虫を皆さんに捜していただいているようなものである。

この春よく目についたヨコツナサシガメはカメムシ目サシガメ科の昆虫だが、集団で生活していることが多く、イモムシなどを刺して体液を吸って生きている。小学3年生の自然体験学習でイモムシの体液を吸っている現場を見ることができた。子供たちを対象にした自然観察では、虫を見つけると子供たちの目の輝きが違って、こちらでも楽しくなる。

しかしこの虫たちも冬になるとぱったりいなくなってしまう。虫も次の年に命をつなぐために、たまご、幼虫、さなぎ、成虫など何らかの形で越冬しているのだが、そこまで追いかけていくほどの熱意はない。

そこで冬には野鳥観察に重点を置いている。もちろん野鳥は夏も身の回りにいて、特に繁殖期は美しい声で囀り、夏羽の姿は美しい。しかし樹木に葉が茂ると姿を見つけにくくなり、日本では夏鳥あるいは留鳥として、繁殖する種類数も冬鳥と比較して少ない。

冬になると多くの水鳥がやってきて、山野に来る小鳥たちも姿を見つけやすい。幸い家から車で10～30分のところに昆陽池、甲山、甲子園浜、猪名川自然林などがあり手軽に野鳥観察ができる。同じところで観察を続けると、渡りの時期や年による増減などが判るようになる。自然環境の変化がどのように野鳥の生活に影響を与えているかもわかってくるのではないかとと思っている。

このように冬は鳥、夏は虫と年間を通して楽しく自然観察ができるのは自然と文化科に所属しているおかげと感謝している。

昨年度1班の班長を担当させていただき、私には貴重な1年でした。今後なんらかの参考になればと、提案を交えて記します。

「班長」の作業は、特別な専門知識や技術は必要なく、ごく普通のマネジメント能力と積極さがあればつとまる一方、得ることの多い業務でした。よかったと思う主なことは、

1. 総務委員会メンバーとして代表及び総務専任幹事から、会全体及び当科の考え方や現況等をタイムリーに知ることができた。
2. 班のメンバーの名前を早く覚え、班懇親会などでより親しくなることで業務を円滑に進められた。同時に自分を知ってもらうこともできたと思う。
3. 自然観察会や歴史散策等で、他班の人々をより早く、多く知ることができた。
4. 班会議議事録作成を通して、活動内容を正確に理解することに役だった。
5. 他班の班長も同じ高等科同期生だったので情報交換や協力関係が円滑に進み、同時に絆を強くすることができた。
6. 「班長」という立場から、活動に率先して参加する積極性を持続できた。
7. フィールドワーク時の記念集合写真撮影から配信を通じ、班メンバーとのふれあいが多く持てた。

（以上の他にもあるが紙面の都合で省略）

ところで「班長」という呼称は班のすべてのことに責任を・・との誤解による重圧感を与え、拒否反応につながる恐れがあるのではないのでしょうか。このため業務内容に沿った名称に変更してはどうか、たとえば「総務幹事」のような名称への変更を、この紙面を借り提案します。

経験に基づく多くのメリットを知っていただくことや、名称変更で「班長アレルギー」がなくなり、新科員にこの業務希望者が続出することを願っています。

キクザキリュウキンカ 完結編

6班 大庭 健

武田尾草本調査で追いかけてきたキクザキリュウキンカ、17,19号で‘13.4.15(開花)～11.14(新芽と塊根)までを報告しましたが、その後の変化を報告し、完結編とします。

2014年1月9日



周りに他の草がまだ生えてこない間に太陽を独占しようと、葉は大きく成長してきた。

2014年3月18日

早くも花芽がで、春一番の開花準備が出来ていた。



1つの株に花が1つの花茎が1～3本出る。

2014年4月3日



開花！1つの花は2～3日で枯れるが、次々と開花し、満開が1週間程度続き、4月末には枯れる。

2014年5月8日

2013年11月14日に掘り返されていた塊根3個を自宅の植木鉢に植え観察してきたが、5月に入り葉が完全に枯れたので、土を掘り返してみると、3個の塊根(最初に植えたもの?)の周りには新たな多数の塊根がで



き(写真の上3つ)、その他にも多く見

かり、栄養繁殖力のすごさに驚かされた。

ヨーロッパから連れてこられた美しく、たくましい『春の妖精』を今後も見守っていきたい。

茶釜の里を訪ねて

1班 岩城 正大

大和の国は「日本文化のふるさと」「日本のまほろば」と言われています。日本人は古代より自然の中で竹の特性と美しさを日常生活の中に生かし、風情のある生活を営んできました。

私は大阪府の東部、奈良県生駒市に隣接する地域に住んで20年近くなるが、全国の茶釜の9割以上を生産している「茶釜の里・高山」をゆっくり訪ねたのは初めてでした。

嵯峨野(京都)、錦川(山口)、揖斐川(岐阜)を日本三大美竹林と言うそうだが、奈良県生駒市にも「高山竹林園」という素晴らしい竹林があります。広大な園内には真竹・淡竹・孟宗竹など約50種の竹や笹が植生され、見事な景観を形作っています。

高山の里と竹林の縁は室町時代に遡るらしいです。当時、この地を支配していた鷹山氏に茶の湯の創始者の村田珠光が、茶道にふさわしい茶を攪拌する道具の制作を依頼し、考案されたのが茶釜だったそうです。

高山の茶釜は、淡竹、黒竹、煤竹を材料とし、2・3年生の良質の竹を油抜きし、冬期に天日干しを行なった後、約2年間倉庫で寝かせて使用します。写真のように、冬枯れの田に竹を干している光景は高山地区の風物詩となっています。

茶釜の形は流派によって定められ、いずれも繊細で巧みな技法で作られ、60以上の種類があるそうです。その技法は、小刀と指先でほとんどを作ることから「指頭芸術」と言われ、国の内外でも高く評価されています。

竹の七不思議の1つに「竹の花が咲くと不吉なことが起こる」と言う謂れがあるそうですが、その竹も一子相伝の茶釜師の手によって魂が入れられると大吉となります。その茶釜でお点前していただいた抹茶は格別で身も心もほっこり、日本文化の素晴らしさを体感してきました。

これからのシニア生活も、無茶釜(むちゃせん)と自然に感謝しながら自然体で生きようと思います。



森の熊さん一家の玉手箱

宮阪 信次

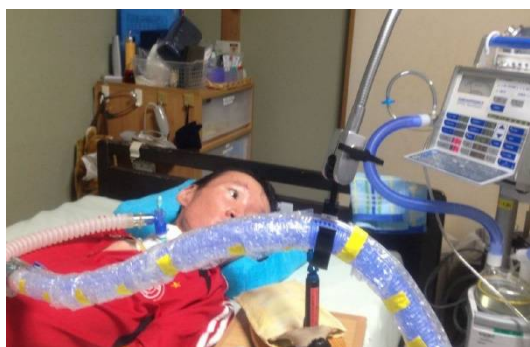
(はじめに)

森の熊さん一家は千里ニュータウンに住んでいる。ボス熊がこの10年間、大学で受け持っている科目「情報化と社会」で、「スローなユビキタスライフ」(関根千佳著)を課題図書に取り上げ、「201×年に生活が自然とかかわり、ゆっくりした生き方を愛し、目立たない先端技術にそっと支えられる、スローなユビキタス社会が来る」を学生と共に見守ってきた。しかし、201×が近づいたが、森の熊さん一家(障害者・高齢者)にとって住みにくい社会になってきてイライラしている。森の熊さん一家のスローなデジタルライフ「吾輩(真司)の生きざま」を証したい。

(吾輩(真司)の歩み)

第1集のまえがきに、1989年20歳の誕生日を迎えるに当たり、何かこの世の中に自分の足跡を残しておきたいといったのがきっかけで文集づくりがスタートした。同じ病気の人たち、その家族の人たち、特に一般の人たちの障害者の理解に役立てばいいと願いつつ取り組んだ。

進行性筋ジストロフィーは恐ろしい難病の一種で、症状が進行性で、筋肉の再生ができず、雑巾のようにボロボロになり、確固たる治療方法がないので、呼吸困難で20歳まで生きられることはまれだといわれている。吾輩は4歳で発症し、10歳で車いす、普通の小学校・中学校で学び、一家で2年間半アメリカ生活を経験できたことが吾輩の人生の宝物といえる。20歳の時救急車で刀根山病院に運ばれ、人工呼吸器生活に入り、19年間病院で療養生活を過ごした。口に箸をくわえパソコン操作をし、インターネット、メール、音楽鑑賞などのデジタルライフが療養生活のQOLを高めてくれた。5年前、ボス熊、母熊の努力で我が家に帰ることができ、現在、多くのヘルパーさんたちと自立生活をしている。



(吾輩(真司)の生きざま)

吾輩は現在45歳で、私を支えてくれている「人」の協力で手作りの7冊の冊子を発行した。ボス熊がスキャナーなどを使い、やっと文集の電子書籍PDF版を完成し、OneDrive(SkyDrive)にアップロードした。

一家のデジタルライフは、ホームページ、日記ブログもあるが、吾輩の文集群も秀逸!

- ・第1集 「神と人に愛されて」(20歳まで生きた感謝の記))(1991)
- ・第2集 「主と共にいます」(30歳を迎えるにあたって)(2001)
- ・第3集 「真司の叫び」(ムンクの叫びに倣った詩集)(2008)
- ・第4集 「人」(人という字は人と人が支えあって一つの文字になっている)(2009)
- ・第5集 「ありがとうマック」(家族の一員だった愛犬マックへの感謝の言葉)(2011)
- ・第6集 「人は皆のために皆は人のために」(詩集など)(2012)
- ・第7集 「私の自立生活」(24時間ヘルパーさんたちとの自立生活)(2013)

第1、第3、第5集はホームページで読んでね。

(冊子の読み方)

ブラウザを立ち上げ、インターネット検索の画面で「OneDrive」と入力する

- ① マイクロソフト社のクラウドOneDriveの表紙画面で、「サインイン」をクリック
- ② IDとパスワードを入力する
(ID: nobumiya1815@hotmail.co.jp
パスワード: jackymack1)
- ③ 「ドキュメント」フォルダーの中に7冊のPDF本がある

(終わりに)

吾輩は過去3度お呼びがかかり、天の故郷へ旅立とうとした。が、「もっと世の中のため頑張れ」と追い返された。命ある限り、前向きにがんばるつもりだ。

(参考) 森の熊さん一家のホームページ

<http://www.eonet.ne.jp/~jackymack>



草抜き考(3) (1)(2)は18号、20号に掲載

大村 沙紀

【スズメノヤリ】 花を楽しむ価値はなく、ただ増えると見栄えも悪くやはり邪魔な雑草扱い。葉は引抜きに耐えるほど強くなく、全体を束にしてもなかなか期待通りに行きません。矢張り道具を根に打ち込んでゆっくりじっくり持ち上げて一網打尽にしないと株がバラけます。結構シブトイ草で往生際が悪いのです。

【ヤエムグラ】 抜くのが簡単で抵抗しないタイプの草で、衣類に種が付いてくるのを気にしなければ、ヤエムグラは抜き手に気を遣った草です。気の毒なくらい抜き易いタイプ。低木などの下から生え出すと、うんと背伸びしていますので、根元をしっかりと見定めることが大切です。抜く時に種をパラパラ落とさない事も来年対策です。ちなみに種の表面は一度ルーペの対象にする価値はあると思います。



【オオバコ】 これが抜けるようになったら草抜きも一人前と言えます。技術だけではなく忍耐力と筋力、特に握力の問題でしょうか。これは人が踏みつけたような硬くなった所にも生えてくるツワモノ。歩く人の靴の裏側に粘性のある種がくっついて広がります。それを処分するのは簡単ではありません。根気が第一です。いずれにしても種が出来る前に抜くことが大事。多数の直線状の長太短い(ナガフトミジカイ)根を地中に張るので抵抗が増し、素人には簡単に抜けるものではありません。道具は必須です。根の強さに対して葉の付け根(葉柄)が弱いのが弱点であり彼らの強みでもあります。根を残して葉だけが取れてしまいます。直ぐに葉は再生されます。小さな時から根だけはしっかり成長しているので小さいからといって舐めてかかると大変です。

【カタバミ】 南向きの壁面などに沿って茎「匍匐茎(ほふくけい、stolon)」を伸ばしてどんどん増えて行くので厄介ですが、その性質を逆手に取り退治するのが技です。つまり一気に引っ張るのではなく地上と地中のスレスレに這う匍匐茎を辿りながら存在を暴き、元から断つのです。ただそうは簡単には行かず何処かで切れて株全体を引き抜くのは容易ではありません。これも種をすっ飛ばします。それを未然に防ぐのが来年に対する予防策。

続く

6月号 俳句・川柳

山上 恵子

学舎は白一色の衣更へ
スキップを遊ぶ幼児に五月雨
土砂降りも小さく降るも白雨かな
一線を越えタ立の降りに来る
梅雨の色消せる彩り傘満ちぬ

谷坂 修二

《ネパールにて》
ネパールのシャクナゲの花白き山
神が住む朝日に昇る白き峰
白き峰またその奥に白き峰
耕して耕しつくす段畑
頂きに達してもまだ段畑
石楠花と雪崩とどろく深き谷

藤田 憲治

お帰りと言ふのは飲み屋の女将だけ
角隠しもいちど妻にかぶせたし
ポイントを集むるために無駄遣ひ
死ぬ死ぬと当たり散らして生きている

大村 沙紀

《川柳コーナーの応援歌》
自文科も川柳集めに四苦八苦
自文科のたより太らず品集め
自文科の広報広報ネタ集め
自文科の他科に勝るや川柳脳
百二個の川柳集め競い合い

風の子

春浅きパステルカラーの山模様
きらきらと緑光りてハイキング
雨降りて心細しや早苗かな

藤(フジ)の花談義

3班 永野 徹

毎年、ゴールデンウィーク前後に藤の花が初夏の到来が真近である事を告げるように満開となり、日本全国を賑わしてくれる。藤は日本の固有種で、大きく分けて関西より西の「ヤマフジ」と関西以东の「ノダフジ」の2種類に分類される。総状花穂がヤマフジより長く垂れ下るフジを「藤の名所であった大阪府福島区野田の地名」に因み、牧野富太郎博士が「ノダフジ」と命名された。藤と言えば、その生命力と紫色の高貴さに係る逸話が多い。

① 藤原氏とフジの生命力

藤原氏の元祖は「大化の改新」で中大兄皇子（天智天皇）に認められ、「藤原姓」を賜った中臣鎌足。その子藤原不比等は聖武天皇に娘（光明子）を嫁がせ、摂関政治で不動の地位を築く。そんな藤原氏は「藤」と同じく他の木（天皇家）に寄生して甘い汁を吸う代表的な寄生樹木（豪族）。藤原氏の紋は「下がり藤」で「春日大社」の砂ずり藤は有名。

② 藤原定家とティカカズラ

藤と同じく生命力の強さの代表樹木がティカカズラ。式子内親王に恋焦がれた定家が、死後も彼女を忘れられず、蔓（かづら）に変わり彼女の墓に絡みつくとする「定家能」が有名。

③ 源氏物語の藤壺女御（作者は「紫」に縁がある紫式部）

藤の紫は古代から高貴な色として日本人に愛されてきた。源氏物語にも藤の名を持つ3人の藤壺が登場。その中で主人公“光源氏”の初恋の女性“藤壺の宮”は「中庭に藤が植わった飛香舎に住む」理想の女性であった。

③ 本願寺の「下がり藤」紋

子供の頃、本願寺系寺で寺紋に藤を見たような記憶が有る。歴史的には始祖の親鸞（鶴丸紋）に始まり、戦国の証如上人（下がり藤紋）、更に顕如上人（五七桐紋）、江戸時代に近衛家の（牡丹紋）と

複雑な経緯がありながら藤との縁は深い。現在、本願寺系は「下がり藤紋」と「牡丹紋」が主流とのこと。

⑤「黒田官兵衛」が伊丹有明城で幽閉されていた時、牢獄から見た藤の花に勇気づけられ瀕死状態から生還して生延びたと言う伝承も藤の生命力の強さを連想させられる。

関西で鑑賞した人気の藤；

白豪寺の藤(丹波)



和気神社の藤（岡山）



自然と文化だより

皆様のご協力により21号が発行出来ました。次号もお楽しみに！（広報委員会）